

**操作性、挿入性と超音波画質を向上させた  
「超音波消化管ビデオスコープ GF-UE290」発売**

オリンパス株式会社（社長：竹内 康雄）は、胃や十二指腸に挿入し、体腔内からの膵臓や胆道の精密診断を目的に、操作性、挿入性、超音波画質を向上させた「超音波消化管ビデオスコープ GF-UE290」（以下、「GF-UE290」）を2019年10月15日から国内と香港で発売します。なお、イギリス、アジアの一部地域は各国の法規制に対応でき次第、順次販売を予定しています。

●発売の概要

販売名	発売時期
EVIS EUS 超音波消化管ビデオスコープ OLYMPUS GF-UE290	2019年10月15日

●主な特長の概要

1. 胃・十二指腸内の操作性を向上
2. スコープの細径化により挿入性を向上
3. 超音波画質の向上により膵臓深部の観察をサポート



EVIS EUS超音波消化管ビデオスコープ GF-UE290



オリンパスは本年10月12日に創立100周年を迎えます。これまで当社の発展を支えてくださったお客さまをはじめ、ステークホルダーの皆さまに心より感謝申し上げます。これからも世界の人々の健康と安心、心の豊かさの実現を通して、社会に貢献してまいります。

## ●発売の背景

当社は 1982 年に膵臓がんの早期発見を目的に、超音波内視鏡を世界で初めて実用化しました。通常の内視鏡では膵臓を直接観察できませんが、超音波内視鏡では胃や十二指腸に挿入した内視鏡の先端部から超音波を発し、その反射画像から体腔内の検査が行えます。その後の技術革新により、超音波画像の高画質化や内視鏡の操作性、挿入性が向上するとともに、診断領域も膵臓のがんや嚢胞、胆道のがん、結石、ポリープ、胃粘膜下腫瘍などに発展してきました。また、2016年に改訂された「膵臓診療ガイドライン」（日本膵臓学会発行）では、超音波内視鏡がCT、MRIに並び、より早期の段階での施行が推奨されるなど超音波内視鏡検査が重要視されてきています。

このたび発売する「GF-UE290」は、2005年に導入した「GF-UE260-AL5」の後継機種で、操作性、挿入性と超音波画質の向上を追求しました。

## ●主な特長の詳細

### 1. 胃・十二指腸内の操作性を向上

スコープ先端部の硬質部長<sup>※1</sup>と湾曲部の短縮化を実現し、胃、十二指腸内の操作性が向上。

※1 CCDカメラやレンズなどの部品が組み込まれ、湾曲しない部分の長さ。



従来機種

GF-UE290

### 2. スコープの細径化により挿入性を向上

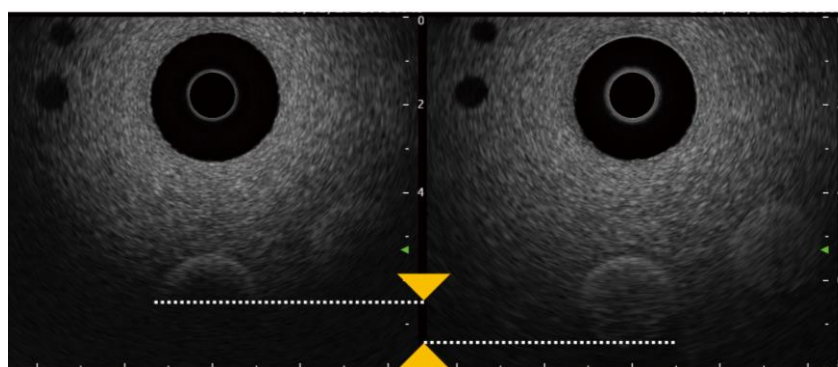
従来機種<sup>※2</sup>に比べて、スコープ先端部外径を0.4mm、スコープ軟性部外径を0.9mmの細径化を実現し、挿入性向上に貢献。

※2 超音波ガストロビデオスコープ OLYMPUS GF TYPE UE260-AL5



### 3. 超音波画質の向上により膵臓深部の観察をサポート

超音波信号処理方法の改良により、遠方の画質が向上し、膵臓深部の観察をサポート。



従来機種

※EU-ME2 PREMIER PLUS の  
THE-P モード ファントム画像比較  
**GF-UE290**

本リリースに掲載されている社名及び製品名は各社の商標または登録商標です。